

[歴史・意匠]

UDC: 72.03(45)

イタリアルネサンスの建築家ジュリアーノ・ダ・サンガッロに関する研究論文集より

[*Giuliano da Sangallo*, a cura di Amedeo Belluzzi, Caroline Elam, Francesco Paolo Fiore, Centro Internazionale di Studi di Architettura Andrea Palladio, Kunsthistorisches Institut in Florenz - Max-Planck Institut, 2016, 455p.]

抄録者註

本書は、2011年よりCentro Internazionale di Studi di Architettura Andrea PalladioとKunsthistorisches Institut in Florenz - Max-Planck Institutとの共同でおこなわれた、ジュリアーノ・ダ・サンガッロ(1445-1516)に関する一連の研究活動の成果として出版された論文集である。ジュリアーノ・ダ・サンガッロは15、16世紀イタリアで重要な建築家を多く輩出したサンガッロ一家の一人であり、本書が出版された2016年は彼の没後500年にあたる。計26篇の論文が、「ジュリアーノとルネサンスの建築」、「ジュリアーノとサンガッロ工房」、「古代のデザインと研究」、「宗教建築」、「住宅建築」という5つのテーマに分けられ、それらによって、建築家、彫刻家、要塞のエンジニア、古代研究家といった、多岐にわたる彼の活動全体の姿を理解することができる。ここではその中から、彼の代表作であるサンタ・マリア・デッレ・カルチェリ教会堂を扱った論文を抄録する。

この建築はイタリアのフィレンツェ近郊の都市プラートに建つもので、ギリシア十字形平面を持つ最初期のルネサンスの教会堂建築として、これまでもウィットコウワーをはじめとするルネサンス建築研究で論じられてきた。本論では、この教会堂において、建築オーダーがいかに内部の壁面を分節しつつ、同時に集中式の空間を組織しているかについて、同時代の作例と比較されながら論じられた。また、設計者の空間のイメージが、断面図に補助線を入れた図解により、人間の目からの視野を示しながら、アルベルティの理論とも関連づけられつつ述べられる。これらの考察ではもっぱら建築の具体的な形が扱われているが、それがそのまま設計者の思想や理念についての考察にもなりえていることは、ルネサンス建築研究のおもしろさの一つと言えるのではないだろうか。

なお、本書が出版された2016年は、ウフィーツィ美術館でも素描展がひらかれ、カタログ(*Giuliano da Sangallo, Disegni degli Uffizi*, a cura di Dario Donetti, Marzia Faietti, Sabine Frommel, Giunti Editore S. p. A., 2017, 190p.)が出版された。

サンタ・マリア・デッレ・カルチェリ教会堂：都市における存在、分節、《建築的な遠近法》

Jens Niebaum: *La Chiesa di Santa Maria delle Carceri: Presenza Urbana, Articolazione, 《Prspective Aedificandi》*

[*Giuliano Da Sangallo*, a cura di Amedeo Belluzzi, Caroline Elam, Francesco Paolo Fiore, Centro Internazionale di Studi

抄録

ジュリアーノ・ダ・サンガッロの代表作であるサンタ・マリア・デッレ・カルチェリ教会堂について、次の3点、周囲の都市環境との関係、壁面の分節、建築的な遠近法という問題、について論じる。

この教会は、13世紀に建築された城に隣接して建てられている。規模としては城と比べると小さいが、城と共通する白色が採り入れられ、高さも城壁と関係づけられた。また、教会の南東角を見ると、城の北西角にある塔に対し、ネガとポジのように凹凸の形が呼応している点でも、二つの建物は呼応している。

この教会の内部では、付柱の建築オーダーが全体にわたって展開され、それによって十字形の腕にあたる四方の空間が全体の中に組み込まれているが、設計者はここでギリシア十字形教会堂の新しい建築形式を意図していたと考えられる。たとえば、中心の空間を四方で支える角の形は、二つの正方形断面の独立柱が壁に埋め込まれ、一つの角で接している状態が表現されたものと解釈できる。つまり、その角は、建築オーダーによる付柱であると同時に、壁の中に吸収された支持柱としても解釈されるという両義的な性格を持っていると考えられる。

また、クーポラの基部は、内部において、力強く出っ張った環状のコニスによって強調されている。そのことの、ジュリアーノ・ダ・サンガッロの意図とは、内部空間の中心に立つ人の3ブラッチャという高さの視点からドラムを見えなくすることだったことは、すでに指摘されてきた。つまり、その位置から天井を仰ぎ見ると、十字形の腕の上にクーポラが持ち上げられたように見え、それが建築家が発想した内部空間のイメージと考えられるのだ。この3ブラッチャとは、アルベルティの『絵画論』から引かれた人間の目の高さと考えられるが、この位置からの見えを検討すると、さらに次の点も指摘できる。ドームを支えるアーチでは、表面の装飾がある高さで終わっているが、内部空間の中心の3ブラッチャの高さからは、そこから下の部分はちょうど見えない部分に相当する。このように、サンタ・マリア・デッレ・カルチェリの建築は、建築内の幾何学的中心に立つ人の目から、完全なイメージとして見えるように意図されたと設計されたと考えられる。

[横浜国立大学 | 菅野裕子・抄]